

看護過程の遠隔講義に対する学生の評価

Student's Evaluation of Distance Lectures in The Nursing Process

鈴木 康宏・高橋 方子・富樫 千秋・米倉 摩弥・大塚 朱美・

石田 直江・菅谷 しづ子

Yasuhiro SUZUKI, Masako TAKAHASHI, Chiaki TOGASHI-ARAKAWA,

Maya YONEKURA, Akemi OTSUKA, Naoe ISHIDA, and Shizuko SUGAYA

【目的】本研究では新型コロナウイルス感染症対策において、看護過程の科目で遠隔講義にラーニングマネジメントシステム（以下LMS）を併用したことに対する学生の評価を明らかにすることを目的とした。

【方法】2020年8月上旬に基盤看護技術論Ⅳ（看護過程）を履修した学生を対象とし、無記名自記式質問紙による集合調査を実施した。調査内容は、年齢、性別、遠隔講義の評価（わかりやすさ、集中度、困ったこと）、遠隔講義に対する評価、課題の取り組み状況（Teamsを用いての課題提出状況、コメントをみたか）などであった。分析方法は単純集計を行った。また、倫理的配慮として千葉科学大学 人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】77名に配布し、71名より回答がえられた（回収率92.2%）。その内、未回答が多い1名を除く70名でデータセットを作成した。女子学生が50名（71.4%）という背景であった。また、Teamsを用いての課題提出状況は35名（50%）の学生が提出したと答えており、まあまあ提出した学生は28名（40%）であった。Teamsでの課題に対するコメントは48名（68.6%）が読んだと回答しており、まあまあ読んだ学生は15名（21.4%）であった。

【考察】課題に対するコメントは7割弱の学生が読んでおり、まあまあ読んだという学生も加えると9割の学生が目を通していたことから付箋と同じように使用することができたと考える。そして、回収の手間や返却の手間がないため、コメントをすぐ返すことができる。LMSを使用することで指導のタイムラグが少なくなることから、今後の教育にも活用できると考えた。

【結論】約9割の学生がTeamsを用いての課題提出やコメントを読むなどの対応していたことから、ほとんどの学生はTeamsを活用できていたと考える。少数の学生ではあるが、個別指導を受けやすかったと回答しており、提出や返却の手間を減らすことにもつながるため、今後もLMSを活用していくことを考えている。

連絡先：鈴木康宏 ysuzuki@cis.ac.jp

千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Chiba
Institute of Science

(2020年9月17日受付, 2020年12月23日受理)

I. はじめに

新型コロナウイルスの患者数増加により、2020年3月24日に文部科学省高等教育局長より、万全の感染症対策を講じることや、授業開始の判断や遠隔講義の活用などについて通知された（「令和2年度における大学等の授業開始等について」）。本学では授業開始時期を5月の連休

明けの5月7日とし、7月1日までは遠隔講義とすることや、演習など対面でしかできないものは7月2日以降に行うという方針が出された。そのため、急遽、遠隔で講義と演習が行えるよう準備する必要が生じた。

今期担当した科目の基盤看護技術論Ⅳ(看護過程)は、講義と演習で構成されている。遠隔講義を行うにあたり、本学ではオンデマンドではなく Zoom を用いて配信することが決定した。パワーポイントを使用した講義ができるため、今までの講義から大幅に変更する必要はなかった。

演習は紙上事例に対して看護過程を用いて看護計画を立案することを課題としていた。例年、学生に計画用紙を配布し、学生が紙上事例についての課題を記入し、教員が回収した用紙に付箋でコメントをつけ、学生に返却するかたちで指導を行っていた。

感染症対策が必要なことから学生との物理的な接触は避ける必要があった。また、郵送の手間などを考えると紙媒体を用いた方式はこのような状況下では相応しくないと判断した。そのため、インターネットを使用して学生が行った課題を確認し、コメントを返すことで指導ができるような環境を整える必要があると考えた。

当初、学生にメールでデータを添付してもらい、課題のやりとりをすることも考えたが、80名近くの学生の提出状況を把握することは難しく、管理が煩雑となることが予想された。そのため、Learning Management System

(以下、LMS)を導入できるかどうか検討した。LMSとは「コンピュータと情報ネットワークを利用した教育手法をeラーニングと呼び、eラーニングを実現するために必要な情報システム」¹⁾のことであり、学習管理システムとも呼ばれるものである。加えて「LMSは、スケジュール管理、出欠管理、レポート提出、受講者への連絡、CBTなどの機能を有する。代表的なものに、Moodle、NetCommons、Blackboard(旧称WebCT)などがある。」¹⁾とされている。(CBTはComputer Based Testの略である。)本学では元々希望する教員はLMSとして使用できるMoodleが用意されていたが、今回は通信量を圧迫することにつながるため、使用不可となった。そこで、別のLMSを模索することになった。

幸いなことに本学の学生と教職員が使用しているメールサービスがOffice365であったことから、Microsoft Teams(以下、Teams)の使用が可能であった。Teamsを用いるとメールアドレスから学籍番号や氏名を紐付けることができるため、新たにメールアドレスを配布するなどの作業もなく、導入しやすい状況であった。そのため、講義はZoomで行い、LMSとしてTeamsを活用することとした。

しかし、今までの学生とのメール連絡などから、必ずしも学生全員のインターネットリテラシーが万全ではな

いと感じていた。そのため、簡易的なマニュアルを作成したうえで開講前にポータルサイトを通じて学生に協力を依頼し、Teamsを用いてデータを提出できるかどうか試験運用を行った。学生の使用状況を確認し、講義開始までにマニュアルの不適切な部分を訂正し、開講した。開講後、最初の方の講義で感想を送ってもらうなどの簡単な課題から慣れてもらうようにし、課題へと移行した。また、Teamsの取り扱いが難しい場合は直接メールでやりとりし、カバーすることができた。

その後7月に対面講義開始となったが、いつ対面講義が中止となるかわからないことを考慮し、学生との課題のやりとりはTeamsを継続することとした。対面講義を行う学生にはパソコンを持参するようにしてもらい看護学部が所有する無線アクセスポイントを用いて、講義時間中に行った課題のやりとりを行ったが、期間中大きなトラブルなく15回の講義・演習を終えることができた。また、遠隔講義を希望する学生はその期間もZoomを用いて演習を継続することができた。

今回筆者はTeamsを含めLMSをはじめで使用したが、課題の回収や返却の管理に関する手間がなくなることや、紛失などのトラブルもないことから教員の業務負担軽減につながるソフトであると感じた。また、場所を選ばずに学生の提出物を確認できること、返却したコメントをすぐに学生がみることができることが、メリットであると感じた。

しかし、学生が遠隔での講義を受けることやLMSを使用した課題のやりとりで時間や場所の制約を受けずに課題を提出することができることや、タイムリーに返却したコメントをみることができることについて、教員と同じようにメリットと認識していたのか疑問が残る。今後の講義形式についてだけでなく、第2波、第3波の到来により同様の事態となったとき、今回の経験を活かすことができるようにするため、学生の視点からも検討する必要があると考えた。そのため、本研究では新型コロナウイルス感染症対策下における遠隔講義およびLMSに対する学生の評価を明らかにすることを目的とした。

II. 研究の意義

緊急事態宣言解除後に新型コロナウイルス感染症患者は全国的にも増加の一途をたどっている。新型コロナウイルスとの共存が求められ、今後も感染対策をしながら、講義・演習を行う必要がある。本研究において、感染対策および学ぶ権利を考えて構成した講義・演習の評価が明らかになれば、感染の第2波の対策をした講義・演習を考える際の基礎資料となる。加えてLMSは、遠隔講義以外での活用もできるため、その可能性を検討する基礎資料ともなる。

Ⅲ. 研究方法

- 1). 調査方法 無記名自記式質問紙による集合調査
- 2). 調査対象
基盤看護技術論Ⅳ（看護過程）の受講学生 78名
- 3). 調査内容
 - (1) 属性（性別，年齢）
 - (2) 感染症対策としての遠隔講義についての理解度（四件法）
 - (3) 遠隔講義を受けた場所（選択式）
 - (4) 遠隔講義の準備（インターネット環境（四件法），資料の印刷（四件法））
 - (5) 遠隔講義の評価
（わかりやすさ（四件法），集中度（四件法），困ったこと（ある・なし））
 - (6) 遠隔講義に対する評価（四件法）
 - (7) 課題の取り組み状況
（Teams を用いての課題提出状況（四件法），コメントをみたか（四件法））
 - (8) 遠隔講義のメリット，デメリット
（複数選択と自由記述）

上記の項目について質問紙調査を実施した（詳細は別紙の調査表参照）。

なお，(2)，(4)，(5)，(6)，(7) の四件法については【(すべて)・まあまあ・ほとんど・まったく】という割り振りで調査を実施した。設問文毎に異なる記載であるが，同程度の学生の認識であることを想定し，分析した。

- 4). 調査時期 2020年8月上旬
- 5). 分析方法
EZ² ver.1.40 を用いて単純集計を行った。
自由記述については必要であれば，意味内容を吟味してカテゴリ化を行い，意味内容ごとに分類し，回答数が少ない場合は原文のまま記載することとした。

Ⅳ. 倫理的配慮

本研究は，千葉科学大学 人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者に文書と口頭で以下について説明した。本研究は千葉科学大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認（承認番号：R02-7）を得て実施した。対象者には，研究目的や，分析方法等の研究内容，調査への参加は自由であること，参加しないことによる不利益はないこと，および調査用紙の提出を以て研究参加の同意とすること，統計処理をした結果を公表することなど研究参加における自由意思と同意の示し方および研究結果の公表時の匿名性確保について研究説明書と口頭で説明した。

対象が学生であることから，研究の説明と回収は単位認定者でない教員が行い，教員は研究について説明する

前に学生に単位認定者でないことを伝えた。回収ボックスは講義室の出口に設置し，教員は対象者の研究協力状況をチェックしないようにした。また出口の回収ボックスへの提出が強制であると受け取られないよう事務室のメールアドレスでも可能であることを対象者に説明し，研究協力の自由意思に関して特に配慮した。

Ⅴ. 結果

77名に配布し，71名より回答がえられた（回収率92.2%）。その内，未回答が多い1名を除く70名でデータセットを作成し，単純集計を行った。

1. 学生の背景と準備状況

学生の背景の詳細を表1に示す。女子学生が50名（71.4%）であった。

表1. 調査対象の背景（n=70）

年齢	19歳	37名(52.9%)
	20歳	29名(41.4%)
	21歳以上	3名(4.3%)
	未回答	1名(1.4%)
性別	男	19名(27.1%)
	女	50名(71.4%)
	未回答	1名(1.4%)

また，学生の遠隔講義の準備について質問した結果の詳細を表2に示す。遠隔講義となった理由が感染対策であることを理解している学生は62名（88.6%）であった。講義を受けた主な場所が実家で講義を受けた学生が43名（61.4%）とアパートで講義を受けた学生が26名（37.1%），大学と答えた学生が1名（1.4%）であった。インターネット環境を整えられた学生は52名（74.3%）で，まあまあと答えた15名（21.4%）を含めて67名（95.7%）の学生はインターネット環境を整えられていた状態であった。

2. 遠隔講義の学生の取り組み

本科目における遠隔講義の学生の取り組みなどの詳細を表3に示す。講義資料の印刷はすべてと答えた学生は30名（42.9%），だいたいと答えた学生は22名（31.4%），ほとんどしていない学生は14名（20%），まったくしていない学生は4名（5.7%）であった。講義も集中できた～まあまあ集中できたと回答した学生が8割以上，わかりやすかった～まあまあわかりやすかったと答えた学生が9割以上という結果であった。質問するのに困った学

生は4名(5.7%)であった。

Teams を用いての課題提出は、提出したと答えた学生は35名(50%)、まあまあ提出した学生は28名(40.0%)、ほとんど提出できなかったという学生は7名(10.0%)であった。課題に対するコメントは48名(68.6%)が読んだと回答しており、まあまあ読んだ学生は15名(21.4%)、ほとんど読まなかった学生は5名(7.1%)、まったく読まなかった学生は1名(1.4%)、読み方がわからないと枠外に記載した学生が1名(1.4%)であった。

3. 遠隔講義のメリット・デメリット

遠隔講義のメリット・デメリットの詳細を表4に示す。遠隔講義のメリット・デメリットについては、感染リスクが少ないことがメリットであると59名(84.3%)の学生が捉えていた。また、遅刻しなくて良いと答えた学生が34名(48.6%)、周りを気にしなくてよいので授業に集中できると答えた学生が25名(35.7%)、対面でないから緊張しないと答えた学生が24名(34.3%)、紙に比べて課題の提出が楽と答えた学生が22名(31.4%)などであった。質問のしやすさや個別指導が受けやすいと答えた学生も少数存在していた。

デメリットとして、1人で受けているので不安と答えた学生が34名(48.6%)、友達と会えなくて寂しいと答えた学生が24名(34.3%)、画面がフリーズすると答えた学生が23名(32.9%)、講師の声が聞き取れないと答えた学生が21名(30.0%)であった。それ以外ではグループワークがないと答えた学生が15名(21.4%)おり、質問がしにくいと答えた学生が9名(12.9%)であった。

4. 学生の達成状況

学生の達成状況についての詳細を表5に示す。75.7～81.4%の学生はシラバスに記載している到達目標に対

して、達成できた～まあまあ達成できたと回答していた。達成度の自己評価が高かったものは「アセスメントや看護診断に必要なデータや解釈について、自立的に調べることができる。」という項目で、達成できたが19名(27.1%)、まあまあ達成できたが38名(54.3%)であった。

5. 自由記述

自由記述については14名から回答があり、「ない」や「とくにない」と答えた者が6名、「ありがとうございますでした」とだけ回答したものが1名であった。

それ以外の7名の記述については以下のものであった(原文のまま)。

- ・上記と同じ 課題にコメントをしてくれるので良かった。
- ・Teams で課題に対してコメントをくれたのでどこを直せばいいかわかりやすかったです。
- ・個別ワークでも一つ一つ丁寧に教えてくれたので取り組みやすかった。グループワークを遠隔でも行えるのもっとわかりやすいと思った。
- ・紙に直接書くよりパソコンで打った方がとてもはかどりました。しかし、まとめるのが難しかった。実習にとっても役に立つ授業なので勉強になりました。
- ・記録の書き方ですが、まだまだ至らない部分はありますが理解できるようになりました。
- ・記録の説明がもっと欲しかった
- ・プリントする紙が高い

以上のように、説明が不足していたという意見や、プリント代が高くついたという意見だけでなく、Teams のコメントによる指導について好感をもって捉えている学生の記載もみられた。

表2. 対象学生の遠隔講義の準備 (n=70)

感染対策のため遠隔講義となったことを理解しているか？	理解している	62名(88.6%)
	まあまあ理解している	5名(7.1%)
	あまり理解していない	3名(4.3%)
遠隔講義を受けた主な場所	実家	43名(61.4%)
	アパート	26名(37.1%)
	大学	1名(1.4%)
遠隔講義を受けるためのインターネット環境を整えられたか？	整えられた	52名(74.3%)
	まあまあ整えられた	15名(21.4%)
	あまり整えられなかった	2名(2.9%)
	まったく整えられなかった	1名(1.4%)

表3. 本科目における遠隔講義の学生の取り組みなど (n=70)

講義資料を印刷したか?	すべて印刷した	30名(42.9%)
	だいたい印刷した	22名(31.4%)
	ほとんど印刷しなかった	14名(20.0%)
	まったく印刷しなかった	4名(5.7%)
遠隔講義に集中できたか?	集中できた	21名(30.0%)
	まあまあ集中できた	37名(52.9%)
	ほとんど集中できなかった	8名(11.4%)
	まったく集中できなかった	4名(5.7%)
遠隔講義はわかりやすかったか?	わかりやすかった	32名(45.7%)
	まあまあわかりやすかった	31名(44.3%)
	ほとんどわからなかった	5名(7.1%)
	まったくわからなかった	2名(2.9%)
遠隔講義の間、質問するのに困ったことがあったか?	あった(以下、記載のあった内容)	4名(5.7%)
	・教育によっては質問の返答に時間がかかる	
	・授業を止めてしまうので気を使うから	
	・出来なかった	
	なかった	51名(72.9%)
	未回答	15名(21.4%)
Teamsでの課題の提出は行えたか?	提出した	35名(50.0%)
	まあまあ提出した	28名(40.0%)
	ほとんど提出できなかった	7名(10.0%)
Teamsでの課題に対する教員のコメントを読んでいたか?	読んだ	48名(68.6%)
	まあまあ読んだ	15名(21.4%)
	ほとんど読まなかった	5名(7.1%)
	まったく読まなかった	1名(1.4%)
	読み方がわからない(枠外に記載)	1名(1.4%)

VI. 考察

1. 学生の背景と準備状況に関する考察

表1の背景については本科目を履修した学生の背景を反映していると考えられる。また、表2の結果より、ほ

とんどの学生は感染対策のため、遠隔講義となったということは理解できていたことが確認できた。

また、インターネット環境についても3名の学生が整えられなかったと回答していることから、一部の学生が

大学で講義を受けることができるように対応する必要があったことが確認できる。

2. 遠隔講義の学生の取り組みに関する考察

表3より、7割以上の学生が講義資料を印刷していたことが明らかとなった。世代的にもペーパーレスに対応できるものと考え、必要であればプリントアウトするように講義では説明していた。そのため、この結果は意外であった。昨年、別の科目で講義をした際にプリントアウトした資料を配付していたため、今までのスタイルの継続は、学生にとって安心できるものであったと推測される。

また、講義も集中できた～まあまあ集中できたと回答した学生が82.9%、わかりやすかった～まあまあわかり

やすかったと答えた学生が90%いたため、遠隔講義であっても集中力や理解度への影響が生じなかったと考えられる。以前に担当した科目の講義でもパワーポイントを使用しており、講義スタイルを変更していないことも関係していたと考える。

そして、質問するのに困った学生も0名ではなかったが少数にとどまっていた。メールなどでも質問を受け付けることを説明しており、対応することができたため、遠隔ということによって学生が質問できなくなるという影響は、ほとんどなかったように捉えている。

Teamsの課題の提出については、課題の進捗によっては毎回提出しない学生もいた。また、Teamsで提出できていない学生の何名かはTeamsの使用に慣れないため、メールでやりとりした場合もあった。それ以外でもパソ

表4. 遠隔講義のメリットとデメリット（複数回答 n=70）

メリット	感染のリスクが少ない	59名(84.3%)
	対面でないから緊張しない	24名(34.3%)
	遅刻しなくて良い	34名(48.6%)
	個別指導が受けられやすい	16名(22.9%)
	紙に比べて課題の提出が楽である	22名(31.4%)
	周りを気にしなくてよいので授業に集中できる	25名(35.7%)
	質問がしやすい	7名(10.0%)
デメリット	友達と会えなくて寂しい	24名(34.3%)
	1人で受けているので不安	34名(48.6%)
	グループワークがない	15名(21.4%)
	学習意欲がわからない	20名(28.6%)
	画面がフリーズする	23名(32.9%)
	講師の声が聞き取れない	21名(30.0%)
	質問がしにくい	9名(12.9%)
	印刷代がすごくかかる	1名(1.4%)
	器具に触れず不安だった	1名(1.4%)
近所がうるさかった	1名(1.4%)	

表5. 学生が認識する本科目における達成状況 (n=70)

人々の多様な価値観を尊重し、個別性を考えた看護計画を立案することができる。	達成できた	17名(24.3%)
	まあまあ達成できた	37名(52.9%)
	あまり達成できなかった	14名(20.0%)
	達成できなかった	1名(1.4%)
	未回答	1名(1.4%)
患者情報から論理的思考を用いてアセスメントし、科学的根拠に基づいた看護計画を立案できる。	達成できた	17名(24.3%)
	まあまあ達成できた	36名(51.4%)
	あまり達成できなかった	15名(21.4%)
	達成できなかった	1名(1.4%)
	未回答	1名(1.4%)
アセスメントや看護診断に必要なデータや解釈について、自立的に調べることができる。	達成できた	19名(27.1%)
	まあまあ達成できた	38名(54.3%)
	あまり達成できなかった	11名(15.7%)
	達成できなかった	1名(1.4%)
	未回答	1名(1.4%)
危機管理の視点を持ち、患者情報から考えられる危険性を根拠に基づいて説明できる。	達成できた	17名(24.3%)
	まあまあ達成できた	39名(55.7%)
	あまり達成できなかった	12名(17.1%)
	達成できなかった	1名(1.4%)
	未回答	1名(1.4%)

コンが修理中であることやトラブルがあり、手書きで作成したものをスマホで写真をとりメールで送信し、課題の進捗などを確認したケースもあった。これらのことを考えると、遠隔講義における課題提出状況に対する教員と学生の認識は大きく乖離していないと捉えている。また、今回の経験を通して、スキャナを使わなくてもスマホの写真で代用できることが確認できたことは、新しい発見であった。

Teamsでの課題に対するコメントは7割弱の学生が読んでおり、まあまあ読んだという学生も加えると9割の学生が目を通していたことが明らかとなった。自由記述でもコメントを介した指導について、好感をもった学生

がいることから付箋と同じように使用することができたのではないかと考えている。

今回、TeamsをLMSとして活用することにしたが、ほとんどの学生がTeamsで提出を行っていたため、提出した学生と提出していない学生の状態が確認できることや、前回コメントした内容を教員も確認できるため、指導や管理を行いやすかったと実感した。また、今までのように回収の手間や返却の手間がなく、コメントをすぐ返すことができるため、LMSを使用することで指導のタイムラグが少なくなることが恩恵と考えた。

今回の経験を通して、少しずつTeamsに慣れていくという手順を踏むことで、ほとんどの学生はLMSを活

用することができるようになったことが明らかとなった。ICTの教育への活用という文脈の中で、LMSの活用についても中西が述べている³⁾が、遠隔講義だけでなく通常の対面講義においても活用していく必要があることを実感した。今回は主に課題の提出状況の管理と学生へのコメントを返すことに使用したが、今後はミニテストなどに活用していくことで、学習効果の上昇につながることも期待できるため、取り組んで行きたいと考えている。

3. 遠隔講義のメリット・デメリットに関する考察

表4より、感染リスクが少ないことがメリットであると8割以上の学生が捉えていた。遠距離の学生もいるため、遅刻しなくて良いと答えた学生も5割弱いたことから、移動に伴う時間的な制約が少ないことは学生にとってもメリットであることが確認できた。また、緊張しなくてよいと感じた学生がいたことや、質問のしやすさや個別指導が受けやすいと答えた学生も少数いたことから学生によっては遠隔講義という環境が必ずしも悪いものではなく、メリットと捉えている学生もいたことが伺える結果であった。

デメリットとして「友達と会えないこと」や、「1人で不安」ということは今回、通信負荷を下げるため、学生のカメラをオフにしたことも影響していると考えられるが、顔がみえることでかえって緊張することや朝の支度に時間がかかる学生もでてくることを考えると、一概にカメラで顔を出すことがよいとは判断できない。グループワークについては学習の進行状態や、教員がすべて準備をしてコントロールすることは環境上難しいと考えられるため、現状では実施困難と判断した。新しく学習したことを踏まえたうえで1人1人が課題を行った上で、グループワークに移行していくことで学習効果が高くなると考えるため、結果的に今回の方法でよかったのではないかと考えている。

画面がフリーズすることや講師の声が聞き取れないことについては、大学の通信の影響なのか学生の環境に依存することなのかは判断がつかない。マスクをつけて講義を行ったことや、ももとの滑舌の問題も否定できないが、対面で行うよりも話すスピードなどにより気を配る必要があると考えられた。また、学習意欲がわからないと答えた学生もいるため、興味を引くような仕組みも今後考えていく必要がある。

4. 学生の達成状況

表5より75.7～81.4%の学生はシラバスに記載している到達目標に対して、達成できた～まあまあ達成できたと認識していることが明らかとなった。本科目は学生がはじめて看護過程を学ぶ科目である。看護過程は問題解決思考をもとにした思考過程が問われ、新しい用語や

記載方法について学ぶため、学生の自己評価により、多少高低したと推測されるが、それぞれの学生が課題に取り組むことができていたことを示す結果と考える。

今回、新型コロナウイルスの対策として、本学でも遠隔講義を実施することになり、今までに使用したことのないZoomやTeamsなどを使用することになった。医療業界においてもICTを活用していく必要性が認識されてきており、新カリキュラムでも「情報通信技術（ICT）を活用するための基礎的能力やコミュニケーション能力の強化」⁴⁾と記載されている。そのため、Web会議システムの活用やLMSなどのICT技術を活用していくことは看護師として必要なスキルとなっていくといえる。

Zoomの使用やTeamsの使用は教員にとっても学生にとっても慣れないため、思うようにいかない場合もあったことが想像できる。実際に何度か質問があり、試していくうちに使用方法を理解することができた学生もいた。諦めずに挑み続ける姿勢は問題解決思考につながる行動といえるので、これからも続けて欲しいと願う部分である。今回、遠隔講義で経験したことを活かし、学生が新しいことに挑戦し続ける看護職となっていくことを期待したい。

Ⅶ. 結論

今回、LMSとしてTeamsを用いたことに対する学生の評価を調べ、まあまあという回答を含めると約9割の学生がTeamsを用いての課題提出やコメントを読むなどの対応していたことから、ほとんどの学生はTeamsを活用できていたと考える。少数の学生ではあるが、個別指導を受けやすかったと回答しており、提出や返却の手間を減らすことにもつながるため、今後もLMSを活用していくことを考えている。

参考文献

- 1) 日本医療情報学会医療情報技術師育成部会 編：医療情報第5版 情報処理技術編。P344, 篠原出版, 東京, 2016.
- 2) Kanda Y: Investigation of the freely available easy-to-use software. Bone Marrow Transplantation, 48, 452-458, 2013.
- 3) 西村 礼子: 教員の業務、大変すぎませんか? 学生が学びやすく、教員が教えやすい環境をつくるために。看護教育, 60(10), 0810-0818, 2019.
- 4) 看護基礎教育検討会 報告書
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html
(2020年9月4日確認)

7) 基盤看護技術論Ⅳを遠隔で受けたことのメリットについてあなたの考えを教えてください。

該当するものにすべて丸印をつけてください。ほかにメリットがあればその他にご記入ください。

1.感染のリスクが少ない 2.対面でないから緊張しない 3.遅刻しなくて良い 4.個別指導が受けられやすい
 5.紙に比べて課題の提出が楽である 6.周りを気にしなくてよいので授業に集中できる 7.質問がしやすい
 8.その他（具体的に： _____)

8) 基盤看護技術論Ⅳを遠隔で受けたことのデメリットについてあなたの考えを教えてください。

該当するものにすべて丸印をつけてください。ほかにデメリットがあればその他にご記入ください。

1. 友達と会えなくて寂しい 2.一人で受けているので不安 3.グループワークがない 4.学習意欲がわからない
 5.画面がフリーズする 6.講師の声が聞き取れない 7.質問がしにくい
 8.その他（具体的に： _____)

9) 今回の基盤看護技術論Ⅳの到達度についてのご自身の評価を記入してください。

	達成できた	まあまあ達成 できた	あまり達成で きなかった	達成できな かった
①人々の多様な価値観を尊重し、個性を考えた看護計画を立案することができる	1	2	3	4
②患者情報から論理的思考を用いてアセスメントし、科学的根拠に基づいた看護計画を立案できる	1	2	3	4
③アセスメントや看護診断に必要なデータや解釈について、自律的に調べることができる	1	2	3	4
④危機管理の視点を持ち、患者情報から考えられる危険性を根拠に基づいて説明できる	1	2	3	4

IV. 今回の基盤看護技術論Ⅳについてご意見・感想がありましたら、ご記入ください。

○調査にご協力いただき誠にありがとうございました。